行政書士しが

発行所　滋賀県行政書士会
発行人　井上超由／編集人　奥野慎太郎
所在地　滋賀県行政書士会館
〒520－0056
大津市末広町２－１（ＪＲ大津駅前徒歩１分）
TEL(077)525-0360・FAX(077) 528-5606
E-mail：shigakai@gyosei-shiga.or.jp
URL：http://www.gyosei-shiga.or.jp/

街の相談相手としての行政書士となるために

広報部長　奥野　慎太郎

「暮らしのことで聞きたいことがあるんやけど、誰に聞いたらええんやろ？」
「行政書士に聞いてみよう！」

これは、今年の1月と2月に、兵庫県行政書士会がラジオで流したコマーシャルの台詞であるそうだ。行政書士である私から見ても、少し手に余りそうな困りごとは、まず「行政書士に聞いてみる」のはよい案であると思う。しかし、実際には、市民の相談相手として、行政書士が一番に挙がるようには感じられない。私は、このことを不思議に思っている。

一般に、困ったときの相談相手として想起されるものは何であろう。たぶん、家族、会社の上司・先輩、友人が多いのではないだろうか。これが専門的な話となれば、医療に関しては医者、法律に関しては弁護士、その他の細かい分野に関しては大学教授に聞くのかもしれない。しかし、一次的な相談相手として、医者はともかく、弁護士と大学教授は、一般市民にとっては少し馴染みがないように思える。馴染みがなければ、実際に相談することはなかなかできないのではないか。

インターネットに頼ることも多いと思うが、ネットの普及により情報が氾濫していると言われて久しい昨今、膨大な情報の中から必要な情報を見つけ出し選択するのは、実は労力的にも技術的にも大変なことであり、なかなか難しい。

結局、相談相手探しに挫折して相談事を諦めたり、相談相手を間違えてしまったりする人が少なからずいるようで、周囲を見ると、無料相談でもよいから相談してみればよかったのではないかと思える事案を時折見かける。誰にどう相談すべきかが十分に世間に認識されていないことは、相談が徒労に帰した場合も含めて、市民にとっては非効率である。

行政書士は、行政手続きはもちろんのこと、市民法務や会社法務などについても当然ながら一般市民よりも詳しい上に、業務が多岐にわたる都合で他の事柄についても比較的詳しく、守秘義務もある。また、そもそも相談しにくいような相手でもない。最初の相談相手としては適任ではないのだろうか。多方面に詳しい行政書士がまず市民の相談相手となり、ここでもし行政書士業務があれば受任し、そうでないものは他の専門職に話をつなぐようにすれば、紹介により他の馴染みのない専門職にも相談しやすくなることも踏まえ、市民にとって都合が良いと常々考えている。

それなのに、なぜ相談相手として行政書士が最初に挙げられないのであろうか。

まず、行政書士に相談するハードルの高さが原因と考える。

これは行政書士の知名度の低さがその一因であろう。選択されるためにはまず認知されることが必要条件であるが、行政書士はその土俵に上がっていない。行政書士が何をしているのか一般に知られていないことが問題なのではなく、行政書士が相談の門戸を広げていることを一般に知られていないことが特に問題である。滋賀県行政書士会では、支部の努力もあり、毎月どこかで無料相談会が行われている。市民ひとりひとりにとって、行政書士が最初の相談相手に適しているかといえば、これだけでは十分だと思えない。地道な活動と同時に、不特定多数に届き、さらに印象強い手法も用いなければ、行政書士の存在が多くの市民の意識に到達することは難しいのではないか。

また、市民が、自分の相談相手をあらゆる選択肢の中から見つけ出すまでに疲れ、実際に相談を依頼する気力を失ってしまっては元も子もない。「法律関連での気軽な相談窓口」といえば行政書士と即座に言われるようになれば、相談までの過程も楽になり、行動に移しやすいだろう。何も考えずに相談できるような道筋を作ることができれば、市民が行政書士に相談する頻度は上がるだろう。

結局、市民にとっては、相当な親しみを持たなければ、たとえいくら行政書士が良い仕事をしていたとしても、そもそも最初の相談相手として挙げられることは叶わない。私の友人・知人は、私が「行政書士である」ことは何となく知っていて、何をする職業かは知らないまでも、何でもとりあえず気安く聞いてくれる。このように、「行政書士だから」とりあえず聞いてみようという感覚を一般に広めたい。

市民の持つ悩みを解決するために、行政書士が「街の」存在として確固たる地位を築くことを目指し、その手法として私の所属する広報部で何ができるのかを考え、実行することを当面の目標にしている。ひとまずは、行政書士の露出を高めることを目標にしているため、また機会があれば報告したい。